

さまが気分を害して反論されたりするのです。

渡辺 お乗りになるお客さまがお怒りになるのですか？
「地域密着」という言葉をよく聞きますが、どうしてそこまで
地元で愛される存在になったのでしょうか？

加藤 当社は愚直なまでに鉄道という事業を一番大事な柱に
しています。そういうところが評価を受けているのではないかと
思います。



渡辺 「おけいはん」のようなユニークなアイデアはどのように
して生まれてくるのですか。

加藤 当社は意外と新しいことが好きなんです。いまや節電の
時代ですが、電車がブレーキをかけた時に架線に電気を戻す回
生ブレーキを昭和初期に導入したのが当社です。ほかにもい
ろいろ取り組んできましたが、これは関西でいう「いちびり精神」
で新しいことに取り組んでみようということはあると思います。
なかでも「ひらパー」は一つの大きな転換期でした。1997(平成
9)年の大規模リニューアル時に、イメージを一新するため「ひら
パー」という呼称を初めて使いました。それまでひらかたパー
クは菊人形をメインに、しっとりしたイメージの遊園地でした
ので、最初は違和感があったかもしれませんが、今では「ひら
パー」と呼ばない人はいないほどです。以来、京阪電車やそ
の他の宣伝についても昔の殻を破った新しい感覚を前面に出
し、その中で生まれてきたのが「おけいはん」キャンペーンで、
現在の「おけいはん」は5代目です。

渡辺 公共性を重んじる精神面を貫きながら、新しいアイデア
を実践していこうという気概あふれる雰囲気が今も社内に満ち
ているんですね。遊び心があって、柔らかな社風をお持ちだか
らこそできることかと思えます。100年続くというのは、なかなか
できないことですが、そこが秘訣なのかもしれません。介護サー
ビス施設も運営されていますが、これも地域密着という考え方
からですか？

加藤 沿線の方々も年と共に高齢化が進み、介護施設も当
然必要になってくる中で、当社グループが介護施設を運営す
るということで沿線の方々も安心感を持っていただけます。現
在、当社グループが運営している施設は非常にご好評をいた
だいており、一部順番待ちの施設もあります。

渡辺 高齢者にとっては、慣れ親しんだ地域から動くというこ

と自体、精神的にストレスにもなります。そう考えると、本当に親
しんでいらっしゃる京阪グループが運営する介護施設にお世
話になれるのは安心感を抱けるでしょうね。

安全を支える 現場の士気を高める

渡辺 加藤社長は非常に現場主義でいらっしゃるそうです
ね。例えば、大晦日に終夜運転を行っている鉄道事業の現
場を自ら視察されるとか。

加藤 それには二つの目的があります。一つは、終夜運転
で初詣のお客さまをお運びして、頑張っている現場を激励
すること。もう一つは、沿線にはたくさんの神社仏閣がありま
すので、そちらへのご挨拶を兼ねた初詣です。

渡辺 現場を大事になさるのは、どのような考えからでしょうか？

加藤 鉄道事業の日々の安全を支えているのは、現場で働く
担当者一人ひとりなのです。だからこそ、できるだけ現場に顔
を出して士気を高めたり、気持ちの緩みが出ないようにして
います。保守点検では、大きな工事や点検は夜間にします。
線路の枕木交換、架線の張り替えなどの現場作業に加え、
運転関係の詰所訪問まで含めると、最低月に1回は現場視
察に行っています。



渡辺 私たちは安全・安心は、あって当然と思いこんでし
まっている面があります。しかし考えてみれば、それを守って
いる方々の大変さは一方ならぬものがあり、社長自らが現場
にいらっしゃることで、より気が引き締まるものかと拝察します。

加藤 やはり安全は基本ですから、さきほどの介護施設でも
当社グループだから信頼していただけるというのは、そのもと
に安全な運行を100年間行ってきたということがあるわけ
です。そこが崩れると社長の根本の信頼を失いますので、基本
となる安全だけは何をおいても守らなければと思っています。

渡辺 CSR報告書を読ませていただいているほどと思った
のは、ヒヤッとする瞬間やハッとする瞬間を見逃さない。そう
いうヒヤッとする瞬間の陰には300ぐらいのもっと小さなもの
が隠れている。事故につながらないという意味において、そ
こが大事なのですね。